三三八号　平成二十二年九月二十日――長崎歴文協短信――

ながさきの空

平成二十二年（寅年）
長崎くんち・今年のみどころ（その二十三）

越中　哲也

昭和五十八年九月発刊「ながさきの空」十四号に私は「長崎くんち・その一」を掲載以来、毎年九月号の「ながさきの空」には各踊町の誇り高き傘鉾物語と奉納踊の事を記してきた。今年も又、踊町の五ヶ町と特別参加の一ヶ町の事を記すことにした。

馬町　馬町方面は一六〇五年（慶長十）幕府の命により、それまで大村藩領であった外町地区が長崎代官所支配地になって以来、馬町は長崎街道の入口として発展し、東馬町・西馬町の二町に分かれ「長崎くんち」の奉納踊に参加している。明治五年東西両町は合して現在の馬町となった。馬町の町名は長崎奉行所御用の節は馬廿五頭を用意した事によっているという。その故に同町の傘鉾には弘化年間（一八四四）以来は馬具一式を飾りつけている。その中でも鞍下に施されている長崎刺繍の亀の図は有名である。奉納踊は先代以来うけついでこられた花柳寿々初師匠指導の本踊で、町内の子供連中も其中に賑かに登場して来ると言われる。

築町　長崎内町に属し慶長五年（一六〇〇）頃、中島川沿を埋めたてこの町が造られ、寛永年間（一六三四―）長崎くんちが始められた時より築町は踊町に参加している。寛文十二年（一六七二）町は東西築町に分かれ、それぞれの町で傘鉾を用意している。東築町は町名に因んで秋草の上に満月、西は松樹の下に三ヶ月を配していたが明治四年両町は合して築町となり、傘鉾は踊町が巡ってくる七年毎に満月と三ヶ月を交替に使用されるという。明治四十三年、当時有名な京都の画人神坂雪佳に依頼し紅白の光琳菊を傘鉾幕用に下絵を描いて戴き、其れをつづれ織として京都で仕上げている、同町自慢の傘鉾の幕である。奉納踊は、明治以後・築町は市場街として次第に繁昌してきた事もあって、町内全員が参加できる「引もの」となり、現在の「御座船」となっている。

銅座町南蛮船（平成十五年）

「御座船」とは殿様が遊楽のために使用された船で、築町の御座船は肥後細川藩の御座船を基本にして造られたと先輩の林源吉先生よりお聞きしたことがある。築町の御座船には殿様は乗船なく家老職が采配を取り、「殿の船遊び」の模様を伝えたと言う。そして此の時の舞として先々代の藤間金彌師匠より伝えられてきた本踊があり、町内子供連中の先引を先頭に賑やかに登場してくる。

東浜町　長崎では中島川を中心に県庁・市役所方面は一五七一年（元亀元）以来、初期に開けた町であり之を内町と言い、その対岸地区を外町とよんでいる。浜町はその時、外町の海岸に開けた町である。然し江戸時代になると外町地区は商業産業地区として繁昌し、浜町には九州各藩の内、薩摩屋敷・久留米藩屋敷・五島屋敷・町年寄高木家屋敷等もあり、寛文十二年（一六七二）には浜町は大町となったので東西浜町の二町に分かれて奉納踊に参加している。

この町の傘鉾は天保年間（一八四〇―）の製作で「傘鉾の飾」は、町名に因んで浜辺に三個の蛤をあしらい、其の内中央に立つ蛤は汐を吹き、其の汐の中に金色まばゆい三樓の蜃気楼を浮び上らせ、其の蜃気楼が傘鉾の動きに応じてゆれ動くという趣向である。幕は七日の前日は白地に紅珊瑚と小さな魚を配したあでやかな長崎刺繍、後日（九日）は緋色の塩瀬羽二重に金色の青海波を織り出している。実に豪華な趣向にも富んだ長崎を代表している傘鉾であると先輩方は記しておられる。

奉納踊は、この町も築町と同様、にぎやかに町内全員の参加をめざして前々回より、町内の田中前会長さんと同窓という事で長崎出身の清水崑氏が協力され、大勢の子供達の囃子方が乗り込んだ篭宮船が、小さな子供連中の先引に引かれて登場し、併せて女子学生達が新体操で、あでやかな龍宮の乙姫様の舞を堪能させて下さる。

八坂町　明治四年六月、それまで本石灰町・今石灰町・新石灰町と分かれていた三町「今と新の二石灰町」を合併し、同地区にあった天台宗寺院現應寺が明治政府の方針もあって「八坂神社」として祀られる事になったので町名を「八坂町」と改め、以来「八坂町」として傘鉾も新調し長崎くんちに参加している。

傘鉾は町内にある八坂神社を取り入れて緑の松と深紅の楓を背景に白木の鳥居を置き、鳥居の上に現應寺に因んで鷹（音はオウ）を止まらせている。更に傘鉾の松の葉は一本一本が長崎硝子細工であり、当町自慢のものである。奉納踊は町の下を流れる玉帯川に因んだ川船で町内子供連中の先引にひかれて登場、川船には長崎刺繍の龍の衣装を身につけた船頭さんが乗り、網をうち魚を取って諏訪神社に献上、其の後川船は豪快な引き廻しとなり、石のダンダンを下ってゆく。

銅座町　玉帯川の河口と浜町（現在の本石灰町）のすぐ近くにあった浅瀬を埋めて築地を造り、其処に唐蘭貿易には必需品であった鋳銅所が造られたのは享保十年春（一七二五）であった。以来その地を銅座とよんでいた。明治元年、銅座は廃止され銅座町がつくられたが「長崎くんち」には参加していなかった。然し明治年間、同町の永見徳太郎は同町の傘鉾他一切を寄贈し同町を「長崎くんち」に参加させている。戦後「長崎くんち」が復興した時、同町も参加し、失われた傘鉾を新調・奉納踊も之れまで長崎になかった「南蛮船」を登場させている。

傘鉾には同町が江戸時代を通じて輸出品として棹銅を製作していた事に因んで、銅製の燈籠を諏訪社に奉納する意をこめて、旧銅座の海岸にあった松の木の下に銅の燈籠を配している。

奉納踊は戦後、長崎の地に新たに発足した在長崎ポルトガル領事館が銅座町にある十八銀行本店内に設立された事と、長崎開港はポルトガル船入港によると言う事もあって、奉納踊に長崎くんちに始めて「南蛮船」が登場する事になった。

船の造りには、初代ポルトガル名誉領事の十八銀行清島頭取や二十六聖人記念館長の結城神父に、南蛮船の囃子方その他は山下誠氏を中心に協力を受け、町内の子供達にはポルトガルの民謡を歌って戴き、大変な好評であった。

更に今年は日本ポルトガル修好一五〇周年の年であり、駐日ポルトガル大使が「長崎くんち」に南蛮船が登場するので、わざわざ諏訪神社の「長崎くんち」に来られ、銅座町の南蛮船に祝詞を贈られるそうである。

特別参加・籠町龍踊　今年の正式の「長崎くんち奉納踊町」が五ヶ町と数が少ないので、特別参加として籠町の方々が長崎伝統の国指定重要民俗文化財の「じゃ踊」を奉納して下さる事になった。

その故に、今年の籠町の奉納踊は正式の踊町のものでないので傘鉾は使用しないで「じゃ踊」のみを奉納されるそうである。籠町と蛇踊の歴史はその昔、籠町のすぐ上の処に、一六八九年（元禄二）広大な唐人屋敷が建造され、その館内にある土神堂では毎年「春節」の時に「月を追う蛇踊」が奉納されていた。この演技の技を唐館の人達に習い、蛇踊楽器もわざわざ唐船によって舶載していただき、今日まで伝えてきたのが籠町の「じゃ踊」で、現在では中国に行っても、このような古風な蛇踊は殆んど見かけないそうである。

※　今年の「長崎くんち」の解説書としては、恒例により「呂紅社」より山下寛一編集の「長崎くんち」が発刊されるのでお読みいただくとよい。（電八三一―〇一六〇）

風信

○九月と言えば御彼岸があり「暑さ寒さも彼岸まで」と言う。今年は例年になく其の感を深くした。

○そして九月二十二日は旧暦の八月十五日で仲秋の名月の夜である。長崎の名月と言えば、諏訪公園には月見茶屋があり、去来が田上尼の許でつくった俳句や、蜀山人太田南畝が土地の方言を取り入れて作った「彦山の月」は有名である。

○江戸時代、長崎で書かれた「長崎歳時記」には旧暦八月十五日名月の夜の事を次のように記してある。

　此夜を俗に豆名月といひ伝え　家々鱠をし、通例・琉球芋（から芋なり）・南京芋（さといも）・大豆を煮しめて近隣の婦女など互に打寄り相にぎわう。尤も騒客・文人の輩ハまた名月の会など催す

　又同日櫻馬場八幡宮祭礼あり。

○十月に入ると十月一日より長崎の氏神諏訪神社の大祭くんちの行事が始まる。これも長崎歳時記にも詳しく記してある。

○今年は本会事務所がある桶屋町が七年に一度の「くんち年番所」と言う大役に当っているので、原自治会長より「是非、協会の皆さん達も参加して下さい」との連絡があった。会員一同「是非参加いたしましょうや」と言って下さった。

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

カット　中村　繁勝　なんばんえびす